第５８回津市総合教育会議議事録

日時：令和６年７月２日（火）
午後３時開会
場所：津市教育委員会庁舎４階　教育委員会室

出　席　者	津　市　長	前　葉　泰　幸
	津市教育委員会	教育長　森　昌　彦
		委　員　西　口　晶　子
		委　員　富　田　昌　平
		委　員　田　村　学
		委　員　山　口　友　美

教育総務部長	家　城　覚
学校教育部長	伊　藤　雅　子
教育総務部次長	長　脇　弘　幸
学校教育部次長（兼）学校教育課長	伊　藤　幸　功
生涯学習担当参事(兼)社会教育主事 ・中央公民館長	松　永　正　春
政策担当参事（兼）政策課長	梅　本　和　嗣
教育施設課長	水　谷　隆　彦
生涯学習課長	江　角　武
教育研究支援課長	伊　東　和　彦

教育総務部長　定刻になりましたので、前葉市長から「第５８回津市総合教育会議」の開会の御挨拶をお願いいたします。

前葉市長　只今より、第５８回津市総合教育会議を開催いたします。

教育総務部長　ありがとうございました。それでは、本日の「１　協議・調整事項」であります「地域とともにある学校づくりについて」に入りたいと思います。まずは、事務局から御説明させていただきます。

教育研究支援課長　教育研究支援課長の伊東です。本日の協議項目「地域とともにある学校づくりについて」の御説明を申し上げます。地域とともにある学校づくりは令和５年度からスタートしました津市教育振興ビジョン後期基本計画の３つの重点施策の中の１つで、令和３年度に全ての学校に学校運営協議会を設置しまして、取組を進めてきております。しかしながら学校運営協議会の委員の皆様が、いかに当事者としまして学校運営に関わっていただけるか、また学校や地域の特色を活かした地域学校協働本部の取組をいかに進めていくか、さらに学校運営協議会と地域学校協働本部が効果的に連携・共同することの難しさなど、地域とともにある学校づくりにかかる多くの課題が明らかになってきております。

それではお手元の資料に基づき、取組内容や、課題等につきまして簡単に御説明させていただきます。恐れ入りますが、お手元のプレゼン資料を御覧ください。表紙に資料の内容を記載してございますが、時間の都合上、ページを抜粋しまして御説明申し上げます。まず１ページを御覧ください。教育環境を取り巻く状況、社会の動向、教育改革の動きと時代の変化に伴い、これからの時代を生き抜く力の育成、学校では得られない知識や経験能力と、地域住民が自ら地域をつくっていくという具体的な意識への転換が求められております。そのような中、学校運営協議会と地域学校協働本部が、目標やビジョンを共有することで世界全体の子どもたちの育ちをつなげていくという、そのような体制を整えていくことが、いわゆる地域とともにある学校づくりであると考えております。

少し飛びまして６ページを御覧ください。津市が目指す地域とともにある学校づくりの体制をお示しする図でございます。先ほども出ましたが、令和３年度に全ての学校に学校運営協議会を設置しまして、地域学校協働本部につきましても、各地域におきましての在り方は様々ではございますが、取組を進めております。この図にもございますように、この学校運営協議会と地域学校協働本部が、目指す子ども像を共有し、両輪となって連携協働することで地域とともにある学校づくりが推進されるものと考えております。そこで、令和４年度から５年度にわたって研修会等も積極的に行いまして、先進的な取組事例等を発信してまいりました。

８ページを御覧ください。令和４年度には、もともと学校へのボランティア活動を中心に行ってまいりました学校支援地域本部の取組を地域コーディネーターが中心となって連携協働していく地域学校協働本部の体制整備を行いまして、コロナ禍における検温等のサポートやトイレの生理用品の管理等を積極的に行っていた事例を育生小学校長と地域コーディネーターに御報告いただきしました。また令和５年度は、地域密着型の小学校では、地域との連携協働は、比較的イメージしやすい一方、中学校の取組のイメージが持てないといった声が同年度に実施しました校長対象のアンケート調査より多く寄せられましたので、南郊中学校から子どもたちが地域で輝く取組につきまして発信していただきました。具体的

には、学校運営協議会で校長から子どもたちの自己肯定感や自尊感情が低いという現状を発信しまして、地域からは地域の担い手や人材がいないことから地域の行事や祭りが減ってきているという課題が出されたことを受けまして、地域も学校も双方にとって良い状況となっていく取組を考えました。学校は、７０名ほどの有志ボランティア団体「南郊お手伝い隊」を結成しまして、生徒が地域の行事等に積極的に主体的に参画することで地域に愛着を持ち、地域のために役立ちたいという気持ちを高め、また認めていただけることで自己肯定感等が深まるのではないのかという期待がありました。実際に、高茶屋ふれあいまつり、雲出フェスタ等の地域のイベントにも参加し、会場の準備や車いす体験、小学生との交流行事の運営、それからテントの設営や椅子の片付け等を行ったり、津市の地域防災訓練へも参加しまして、生徒自らが筆談しながら訓練の誘導をしたりする姿があり、自己肯定感の高まりが見られた取組を紹介していただきました。一方、一志東小学校からは公民館が中心となり取り組む地域学校協働活動の取組を紹介していただいたという事例もあります。このように、先進的な事例を紹介しながら、また今年度からは経験豊かな校長ＯＢを学校サポーターとして、取組が進んでいない学校への巡回支援等を現在行っております。

それでは１２ページを御覧ください。学校運営協議会の課題としましては、学校運営協議会の委員が当事者意識を持って活動し、学校と地域の課題解決に向けて実際の活動につなげていくことが難しいことが挙げられています。また現在は年間３回の協議会を実施しており、委員には授業参観や他の行事に参加していただきました際に、お話の機会を持つなどの工夫をしている学校もありますが、やはり３回ではなかなか課題解決につなげることが難しいという声もあります。今後は必要な支援が行き届くよう、学校サポーターや指導主事の学校訪問等により、各学校の取組行事をしっかりと把握するとともに南郊中学校の取組発信から多くの中学校がヒントを得ましたように、先進的な取組事例や成功事例を、研修会や津市ｅラーニングポータル等におきまして、情報提供を行っていきたいと考えております。さらに、子どもたちが学校運営協議会等で直接意見を述べたり、子どもたちの意見が地域学校協働活動となって実現するような取組が展開されるよう、地域社会の担い手である子どもたちが主体となっていけるような教育活動につなげていきたいとも考えております。

生涯学習課長　生涯学習課長の江角と申します。地域学校協働本部の関係でございます。私のほうから御説明させていただきます。着座にて失礼します。

資料１３ページをお願いいたします。地域学校協働本部に関わる主な課題としましては、地域側ではなく、学校長の学校側の校長や教頭がコーディネート業務を行う学校もあることや、地域によって地域学校協働活動の取組の進み具合に差があること、また地域と学校は貸し借りの関係ではなくウィンウィンの関係にな

るになるのが理想ですが、地域と学校との間で積極性に温度差がある地域もあることが挙げられます。地域学校協働本部は、全ての地域に設置されておりますが、様々な形態がありまして、必ずしも特定の事務所があるわけではなく、地域のつながりも密接な所、希薄な所と地域によって様々でございます。そのため、先ほど教育研究支援課長からありました各地域における先進的な取組を他の地域に横展開していく際にも一律的な方法は難しいと考えております。

今後の方向性でございますが、地域コーディネーターを中心としましたネットワーク化を進めまして、学校の負担が大きくならない地域学校協働活動を目指すこと、それぞれの地域に応じた学校を核とした地域づくりの実践、また地域と学校が目標ビジョンを共有し地域と学校、双方向の連携協働体制を確立したいと考えております。

恐れ入ります１４ページの今後の取組についてお願いいたします。令和６年度は、昨年度に学校長に対して実施しました地域学校協働活動に関するアンケート調査結果を踏まえまして、全ての学校を訪問し、各学校の学校運営協議会や、地域コーディネーターの取組状況の実態把握を行っているところです。学校運営協議会に関しましては、学校長による積極的な発信や学校の課題につきまして引き続き協議などを行うとともに、先ほどの教育研究支援課長の説明にもありましたように、児童生徒が学校運営協議会に参画することにつきまして検討していきます。今年の６月７日には、新任校長と新任地域コーディネーターを対象に研修会を開催いたしました。前半は社会教育の分野で活躍されている馬場裕次朗先生から地域学校協働活動の意義やコーディネートの手法につきましての御講義を頂き、後半はグループごとの意見交換を行いました。研修会は、残り２回開催を予定しております。また今年度につきましては、学校長に加えまして、教職員や学校運営協議会委員も対象としまして地域学校協働活動に関するアンケートを実施する予定です。今後も教育研究支援課と生涯学習課が連携しまして、地域による学校への支援ではなく地域と学校が連携協働した取組の充実を目指し、そして地域とともにある学校づくりと学校を核としました地域づくりを併せて実現するために、各学校地域の実情に応じた支援をしていきたいと考えております。

説明は以上です。

津市長　ありがとうございました。では地域とともにある学校づくり議論をさせていただいてきますが、どうしますか、別々にしますか。学校運営協議会を先に行いまして、その後学校協働本部を行いますか。それとも一遍に行いますか。どちらのほうがいいですか。いろいろと意見がある場所が違うのかなと。それで始めてみましょうか。

では最初に、学校運営協議会につきまして、まず御意見、コメントなどしていただける方、どうぞ御発言をくださいませ。西口委員からいきますか。では、どうぞ。

西口委員　学校運営協議会が動き出して数年が経過しましたが、やはり一番の核は、いかに学校運営協議会の委員にいかに当事者意識を持っていただくかということだと思います。例えば、６ページの表を見ていただきますと、校長から委員に説明を受けて承認を受けてという形で、済んでおりますので、それをいかに当事者意識につなげるかということですね。例えば、ある学校では子どもたちに紹介をします。１歩は進みますが、紹介だけで済んでおります。しかしその紹介の中で、もし子どもたちとの間でやり取りがありますと、学校運営協議会の人たちも何か気づくことがあると思いますし、それから子どもたちにも、学校運営協議会というのが学校にはあって、こんなに僕たちの学校を良くするために意見を言ってくれているんだ、という意識になっていくということが１つです。ですから、委員さんにいかに当事者意識を持っていただくかということです。もう１つは、地域との連携を進めて行くときにやはり学校運営協議会の人たちには、特に地域の代表者として来ていただいているわけですから、例えば７ページのこの細かい図の中の学校運営協議会の２つ丸印がありますが、２つ目の地域学校協働活動に関する協議にやはり重きを置いて学校・地域間の橋渡しをしっかりしていただけるようなところにシフトしていただけるといいなと思っております。

実は少しだけ例を出していいですか。私は民生委員をしておりまして、民生委員は１００周年になりますので、小学校６年生を対象に出前授業をしました。そのときに、子どもたちは今まで何も思わなかった民生委員がそれぞれの地域にいて、こんなことをしてくれるということを、実際に話しかけたことによって子どものものになってきました。それで、子どもたちも質問し双方向のやり取りがありまして、さらには、ある学校ではそこから国語の授業に発展して民生委員をゲストとしてインタビューをしていきました。一つのことから次につなげ授業が膨らんでいきました。ですから、学校運営協議会も協議会という会議ではなくて、いかに実際に活動をしていくかということが１つのキーになっていると思います。以上です。

津市長　今は西口委員からは、この２つ学校運営協議会の運営の基本方針の承認とそれから地域学校協働活動の内の後者につきまして、どんどん地域の代表とのコミュニケーションを深めていくということ、そしてそれを子どもたちも巻き込んでいくことも必要ではないかというこういう意見ですが、どうでしょうか。そのあたりは。教育委員会はどうですか。

教育研究支援課長　先ほど西口委員がおっしゃいましたように、子どもたちが参画するということで、朝陽中学校が生徒会と学校運営委員さん方とお話する機会を毎年１回持たれております。その中で子どもたちがこんな学校にしたい、したいなとか、こんなふうにしていったらいいな、ということを発言したりしております。

以前、学校運営協議会の担当をしておりましたときに、障がいのある方がいらっしゃいまして階段の昇り降りが大変なことから階段の所をスロープにしたいということがあったり、階段が滑るので滑り止めを作ってほしいというような要望が挙げられまして、委員さん方の間の中から何とかしていかないけないなということがあったということを聞いております。

そんなふうに子どもたちが学校をこうしていきたいというような、困っていることを委員さん方に伝えることで何か実践していったこともありましたので、それも１つありなのかなと思いました。

西口委員　子どももちろんですが、一般の先生も巻き込んでいくことも必要です。今はどうしても校長先生と学校運営協議会の委員だけですので、会議の場をオープンにしていくということが１つあるのかなと思います。

津市長　ありがとうございます。ほかにございませんか。よろしいですか。

富田委員　いろいろとお話を聞かせていただきながら、やはり難しいなというふうにすごく感じました。私自身は幼児教育・保育に関わっておりますので、「地域とともにある園づくり」というものは、９０年代の終わりから子育て支援の拠点となりなさいとか、担い手となりなさいということが言われるようになりました頃から、何かと園もかなり積極的に取り組まれてきました。しかし、園として行っていく場合には、学校よりもかなりやりやすい面が幾つかありまして。それもやはり先ほどの先進事例として聞かせていただきましたような内容を聞きましても、例えば学校側としましては、子どもの自尊感情が低下しているため、これをどうにかしたいというときに、恐らく、それは子どもたちが何かしら役割や責任を与えられて、よくやったね、頑張ったね、というふうに褒められることによって高まっていくのかなと。またそのためには、普段の自分たちとは違った役割ということで、ボランティア的な役割と責任があってということで、地域としましては祭りの担い手が不足しているというようなところで、子どもたちにぜひそうした役割を果たしてほしいと思います。そういうお互いのある種の「こうありたい」みたいなものが一致しましたところでウィンウィンの関係を作り出そうとしたというふうなお話で、非常に良い事例だと思います。その一方で、どうしてもそういった内容は授業の、要するに教科の授業外のところでしていかなければ

いけないものですので、恐らく学校の先生方の負担は相当なものだったのだろうなと思います。

園で行う場合には、保育の内と外というような境界があまり引かれませんので、普段から時間も緩やかですし、活動する場も緩やかですから、日常の保育の中で自然とさりげなく巻き込んでゆくというふうなスタイルを取りやすい。しかし、教科の授業外のところで行っていかなければいけないというところが本当に難しいなというように感じました。

それで、先週、先々週とある自然豊かな園のほうを少し見に行かせていただいておりました。そういうところでは例えば子どもたちの発達をより促すためには、いわゆるいろいろな環境やものとか、人たちと関わることが大事なので、子どもたちは普段からお散歩に出かけて地域のいろいろな人と関わり、お話をするわけです。そうするうちに地域の人たちの中で、このおばあちゃんは虫の専門家なんだとか、ここにはいい畑があってこんな面白い作物を作っているんだ、というふうなことを発見しまして、それについて詳しく聞かせていただいたり、あるいは体験的に関わらせていただいたりということを行っているのですね。それで、森や川のフィールドの所でも、川遊びをするうえでは、子どもたちが川に入ると危険なものがあると裸足で入ってはいけませんので、地域の人に協力していただきまして、一緒に川のごみをさらっていくということを行ったり、普段から犬の散歩で犬がそのあたりに糞をしないようなこともお願いの立て看板をしたり回覧板を回したりして、その辺の協力を得ていただく。それで、普段から身近な所に子どもたちの存在を感じますと、より園のことも身近になってきましてその内容を知ろうとしていきますし、ある園では自分たちの給食を月１回地域の人に食べていただくという取組で給食の配膳なんかをするのは子どもたちの役目ですね。子どもたちが配膳をぷるぷる震えながらきちんと運び終えてそれを途中手を出すのではなくて見守るという。それこそまさに子どもたちが自分の役割を与えられて、責任を持って果たしたといったところを、その成長姿を地域の人に見守ってもらっている。その状況も日々の保育の中で特別に普段きちんと保育をやっているというところに携わった人がくるのではなくて、自然とその中に盛り込ませるということもできています。地域のおじいちゃん、おばあちゃんと月１回ラジオ体操をする時間がありまして、ラジオ体操後に年長がおじいちゃん、おばあちゃんにそれぞれ、陶器の湯飲みを持ってお茶をあげてまわるということもしている。わざわざ陶器のものにしていることというところも重要で。非常に見てて緊張感を高めて動作を制御しながらするところに年長としての成長も感じたりするわけです。

ですので、非常に難しいと思います。学校で教科を絡めて難しいと思いますが、そこをうまく絡ませていけるととても良い内容になるのかなという気持ちです。

津市長　どうですか。教員の負担の動きもあるという話もあると思いますが…。

学校教育部長　何か子どもたちに体験させようと思うと先生たちの負担が非常に大きくなる部分も一方ではありますし、先ほど南郊中学校の事例も土日の平日以外のところで子どもたちが動いているというふうなところもありますので確かにその辺りについては学校としては非常に難しいところでもありますが、一方で教科横断型ということを言われておりまして、教科で得た知識を教科で終わることではなくて、やはり得た知識を子どもたちが実生活の中で活かしていくということを考えていくと、総合的な学習の時間がまだまだ実践的になってないなというところが課題としてあります。

ですので、実際に子どもたちが動いていくそういった体験型活動については総合的な学習の時間、高学年ですと総合的な学習の時間も中心にそこで活動できる所を地域とともに活動して行き、さらに任意になってくるかわかりませんが、地域へ出ていき、ボランティアとかいろいろな活動を子どもたちが自分自身の責任でまた地域の方とのつながりの中で動いて行けるような、そういった子どもたちを育てていくにはまだまだ総合的な学習の時間など教科等横断的というそういう視点で先生たちが考えていくことが１つ大事なのかなということと、後は地域の方にいろいろ助けていただくことで先生方の負担も軽減していくことも多くあるのかなということも思いますので、そういった体験学習とは別に支えていただく地域学校協働活動の中でいろいろ負担軽減になっていくものもあるのかなというふうには思っております。

山口委員　これからの津市、教育委員会などを、市民の方々に見ていただく機会はあると思いますが、伝わりにくいのではないかなと思っております。学校運営協議会と地域学校協働本部というものがあり、さらにそれぞれ法律・規律があるということで、経緯が分かりますが、それぞれ流れがあると思うのですね。その中で、そもそも学校運営協議会の委員の方々は地域の方々ですよね。地域と学校という言葉がどうしても私には馴染めず、地域と学校とはなんなんだろうと思ってしまいます。学校運営協議会と地域学校協働本部は、法律的な中で、これは絶対学校運営協議会でしないといけないことなどそれぞれ役割があるはずで、円が２つあり、ほとんどが重なっておるようですが、重なっていないところが少しずつあると思いますので、そこを書かないとこれらとの連携など地域コーディネーターがつなぐのは大変な役目ですよね。離れているようにしか見えませんよね。体験をするとか自己肯定感とか持つというのはそもそも校長先生だって学校運営の基本方針があるのに何かしないといけないことだけをしておいて協調しているところは全部括ってしまいましたら、それをするためにどうするかという図にな

るのではないかなというふうに思うのですよね。そうでないと、全く違う方たちが関わってということになるのではないかなと思っております。これはすごく無理なことなのですね。

津市長　法律的なところでですね。どうぞ、教育委員会。

生涯学習課長　確かに聞きながらなるほどと思いましたが、１枚の絵に描くと別々の絵に書かれておりますが、結局、例えば６ページの図で申し上げますと、地域学校協働本部の所に、地域住民、団体機関、保護者などという言葉がありますが、その中からも学校運営協議会の委員としまして、例えば地域住民代表でしたり、保護者代表など、こういうような記載になっておりまして、地域の方々が学校運営協議会の委員にもなっていただきまして、その学校運営協議会という熟議の場で議論をしまして、地域と学校の協働活動を、というようなそういうイメージで作り上げられている図でございまして、説明になっているかどうか分かりませんが、あくまで別々のものではなく地域と学校が連携・協働してというような形で、それで、地域コーディネーターも真ん中に書いてございますが、地域の代表の方的な方が学校運営協議会の委員にもなっていただきまして、地域と学校を繋いでいただきます。それで、地域の中もそれぞれネットワークがございますので、例えばこういう話であればここの団体の人にお願いしたらできるかなとか、こういう話であればここの団体に頼めばいいかなとか、そういうようなイメージで考えているところでございます。

学校教育部長　私も答えになっているかどうか分かりませんが、そもそもこの６ページの図ですが、地域学校協働活動という真ん中に書いてある活動を、この地域コーディネーターが繋ぐみたいな図になっておりますが、もともとこの地域学校協働活動になる前に、学校支援地域活動という地域本部というものが前身としてありまして、それが平成２６年に地域学校協働本部へ社会教育法が変わりましたことにより変わりましたが、もともとは学校に対する支援・ボランティアですので、上のほうに書いてあります見守り、本の読み聞かせ、図書館の整理などこういったことを学校に対して支援しましょうというそういう支援を地域の方にしていただくというそういう動きをしていただくことが学校支援地域本部の動きでした。

　しかしそのことにより、ただ学校が潤うだけでなく、先ほど生涯学習課長もおっしゃいましたように、やはり地域も学校を核としましてもっと輝くために、ウィンウィンの形を地域と学校が持つ必要がありますよというふうなことを国の方が打ち出しまして、名前が地域学校協働本部という名前に変わりまして、両方

がウィンウィンになるような活動の展開をしていきましょうというふうなことになってきました。
　それで、じゃあウィンウィンってどんな活動なのとなりまして、下のほうにあります例えば防災活動など学校の子どもたちが地域に貢献する、それで地域からもいろいろ助けていただくという活動も地域学校協働活動としましてしっかりと位置付けていこうというふうな動きに、今こういうふうな図にはなっておりますが、そのあたりの地域のニーズと学校のニーズ、課題とがうまくマッチングしまして、どちらもウィンウィンになるようなそういう活動を目指しているという、イメージとしましてはそのような感じです。

山口委員　それぞれ経緯がありますので、整理があって経過ということで分かりますが、そもそも小学校や中学校が核になって地域というものが出来上がっているということで、その地域というものをどういうふうに捉えるかということが今少しあるだけです。ですので、ウィンウィンというのはまたそれもおかしい話だと思っていて、子どもたちは地域の構成員としまして確かにそこに住んでいるわけですから、見守りでありましたり、先生方がしみじみとおっしゃっていただきましたいろいろなことは、学校によっては全部必要なことですのでされるということですので、何が言いたいかと言いますと、何をされるにしましても、地域でもあり学校でもあることですので、図の書き方のような気がします。何をするかということはもちろん大事ですが、構成をするとか、地域の中の学校であるというような図の書き方をされますと、分かりやすいのかなと思ったり、連携の仕方など、それでそもそもこれだけは絶対こちらの名前の中でしなければいけない学校運営協議会の中で絶対これだけはしなければいけないことはあるはずなのですね。校長先生や学校との何かが。

教育長　まず、地域は、基本的にざっくり言いますと、小学校はもちろん小学校区です。ここで言う地域は例えば、地域がどこまでかと言いますと、津市は全部地域ですよね。中学校は中学校区でまた広くなりますよね。それで、学校運営協議会で絶対しなければいけないことは、簡単に言いますと、校長先生がこんな学校にしたいんや、こんな子どもたちにしたいんやとまずはそれです。それで、それを地域のここの学校運営協議会の委員さんにしっかりと理解をしていただきます。
　ですからよく言うことは、校長先生がしっかりと発信していますか、というそこです。それが、例えば紙に書いてあることは何か、極端なことを言いますと、それを読みまして、こんなんですわ、未来の学校像はみたいなことを熱意もなく言っているようですと、保護者にも地域にも伝わりませんので、まずはどのような学校にしたいのか、どのような子どもたちにしたいのか、これからの世の中を

生きていく子をどんなふうにしたいのかということをしっかりと学校運営協議会の方に伝えないと。

そして、そのためにはいったい何をしていかなければいけないのかという議論をしていくのが学校運営協議会で、最後、今年それができたのかどうかという評価も確実にしていただかなければいけません。しかし、よくここにもありますが、学校運営の基本方針、最後の評価などがすごく大事だと言いますが、実はそこに至るまでに何をしたのかですよね。こういう子どもたちの姿を追い求めるためにいったい何をしないといけないのか、そのために地域のこんな力を貸して下さい、などかなと思います。

ですから、学校ごとに課題はあると思います。例えば１つ言いますと、これは本当に最近のお話ですが、ある学校で、ある学級が非常にもめている状況がありました。今までですと、学校では一生懸命先生の間でどうしましょう、教育委員会の中でどうしましょうという感じでしたが、今はそうではなくて、学校運営協議会の皆様に１回相談しましょうということになりまして、実際に学校運営協議会の委員さんにも教室やいろいろな保護者との話し合いを見ていただきましたりと、そういうふうな関わり方、要は単に学校を見ているだけというのではなく、実際に学校運営に参画とよく言いますが、参画していただくという立場です。

ですから、学校の教員と一緒になってという形で、その代わり守秘義務はしっかり守っていただかないといけないというふうなことですが。ですので、そのためには何をするかということにおきまして、地域学校協働本部といういろいろな地域が活動してみえる方がいらっしゃいますので、その学校運営協議会の地域コーディネーターは必ず１人学校運営協議会の中には在籍していただきまして、その議論を聞いていただきましたうえで、そのために地域のどの団体とどう繋いでいくかということ、そのためには学校に来ていただきまして勉強を教えていただくこともあるでしょうし、逆に子どもたちが地域へ出ていって学ぶこともあるでしょうしという、そういう関係をいかにつくり、またその中で子どもたちをいかに育てていくかということが重要だと思います。

山口委員　おっしゃることはすごく分かりました。３回行われるということで、その３回で少なくともその方針を発表しまして、何をしたのかを。

それで、特に何をしたのかのところに地域学校協働本部の方々のサポートも頂きながらしまして、検証・評価をするということなのですね。その間の方針に則って何をするかということに関しても、サポートと言いますか、協力していただけるということなのですね。

教育長　今は実態としましては、例えば各学校の状況に応じまして授業を見にきていただいたりもするでしょうから、３回以上にしてもらっている所もあると思

いますので、何回しなければいけないということではなくて、今はお金の問題もありまして一応３回としておりますがそのあたりもう少し流動的にしまして、もっと関わっていただいておりましたら、５回ぐらいとか、そんなところがあってもいいのかなって、やはり学校によって違うと思います。

それともう１つはどういう発信の仕方を校長先生がされるか、それをどうやって学校運営協議会に受け止めてもらって、それだったら必要やないかってなったら活発になると思いますし、そこの地域コーディネーターが間に入る人がどうかという話。それを今までは教頭先生とかそういう方がしていただいていたのですが、それではということで、ただ地域コーディネーターってどなたがしていただくって、これはこれで非常に大変です。皆さんも本当に苦労していただいています。

そんな実態もありまして、津市内でも一応学校運営協議会もありますし学校協働活動と言っていますが、やはりそれぞれまだまだすごく進んでいるところもあればなかなかというところもありますので、そこをどうやって高めていこうか、その辺の研修の仕方など、生涯学習課長と一生懸命考えています。そんな感じです。

山口委員　伝える仕組なんだなというのはよく分かりました。ありがとうございます。

田村委員　少し質問なのですが、聞いた記憶がするのですが、申し訳ないです。地域コーディネーターさんは何人いらっしゃいますか。各学校に皆１人ずつ。

学校教育部長　学校運営協議会に出ていただくのは１名ですが、地域学校協働本部のほうにいろいろな活動の主体がありますのでそこに１人ずつ地域コーディネーターを置いているところもありまして、代表として学校運営協議会に１名出ていただくというふうな形です。ですので、出ていただくのは学校運営協議会、先ほど教育長がおっしゃったとおり出るのはこちらです。きちんとした形で運営しています。

田村委員　よく人材の確保ができているなと思いまして、大変ですよね、教育長に言われたら、山口委員の御質問も聞けて、私も大分理解が進んでおります。ただ、確かに回数多くいけば熟度とか当然上がると思いますが、想定されるメンバーを見ていますと自治会長さんにせよ、民生委員さんにせよ、ほかのところにもいっぱいいろいろな役割、地域の自治会長としての役割以外にも担わされている部分がありまして、ここだとたったの年３回と思うかもしれませんが、実際に民生委員さん、自治会長さん引っ張り出されている機会というのはもう掛け算掛け

算の世界だと思うんですよね。いっぱいあり、そうなると学校だけの都合でうまくいかない部分もあるのだろうなというのは感じました。
　それと、課題の中にありましたが、次の世代への接続というか、記憶違いだったら申し訳ないのですが、去年の校長先生方との懇談会のときにある学校の校長先生がですね、学生さんでしたか。

学校教育部長　芸濃です。

田村委員　思い切って入れて、その若い世代が入って雰囲気を変えたいと思ったら本当に変わりましてねっていうことを仰ってみえたことを思い出しました。なので、そういうことは懇談会の中でも発言がありましたのでほかの学校にも共有されているとは思いますし、そうかと言っても簡単に若い世代をっていう若い世代がいなくて苦しんでいる地域もありますね。
　そういうことをいっぱい広げていければ、メンバー構成が失礼ながらどんな委員会を見ても出てくるような肩書の方々なので、そういう面では逆にいろいろな分野を知ってみえる方々と言えるか分かりませんが、変わってくるのではないかなと。すみません、意見というか感想みたいになって申し訳ないです。

津市長　ありがとうございます。ここまで聞いていただいてほかにそういう御意見があれば、どうぞ、富田委員。

富田委員　７ページの中で気になっていたのが、最初に計画をつくるのが学校運営協議会で、その後、地域学校協働本部で具体化してという感じだと思いますが、何となくそうしますと、今学校現場で「主体的・対話的」なという方法で舵を切っている中で、学ぶ主体である子どもの声って一体どこで拾っているんだというところが気になりました。先ほどの防災の話も「防災大事なんだよ」ということで上の人たちが決めて防災計画を立てて、それに子どもたちを参加させるという形は全く主体的ではなくて。子どもたちが例えばこの間の能登半島地震なんかを映像で見る中で、「自分たちの防災訓練はどうなっているんだろう」という声が授業の中で挙がってきて、自分たちの町の防災をどうにかしたいという声が挙がっていますよというふうに、現場の声を学校運営協議会に挙げていって、そこから防災について学ぶんだと。そういうふうにつなげていったらどうかなと。やはり子どもとかあるいは先生方の最前線の現場の声というのがまずあって、そこから狙いや計画を立てていくものではないかなとふうなことを思いましたので、そこのところのＰＤＣＡサイクルが少し気になっています。

津市長　後半、地域学校協働本部側からのかなり重なっているのですよね。それもしなければならないのですが、そこにいく前に私からはこの校長がどういう形で地域学校協働本部に発信というか説明をするか６ページの表を見て思ったのですが、学校の内部方針とか最近こういう教育活動したいとか説明をして承認を受けられ、意見を求めるとかありますよね。この委員の側にも学校長というものが入っていまして、学校長の諮問機関ではなくて学校長自身も委員になる機関なのですか。

学校教育部長　これは国の方が入ってもいいし入らなくてもいいという制度がありますが、津市の場合は今まで入っている学校と入っていない学校とありましたが、実際、学校運営協議会の方にはいろいろなことを話し合っていきますので、学校長も入りますが、先ほどの学校運営の基本方針の承認していただくときには委員会の委員から外へ出て承認を得るとそういう形でやってくださいと国からの確認を取らせてもらって、そういうイメージです。

津市長　校長自身が、この学校運営協議会でいろいろな意見を言っていただいたりというと、なるほど、そういうことかという校長自身の気付きとか校長自身がそうかと学校運営協議会の委員の皆さんにはこういうふうに見えているんだなと、あるいはこういうふうに受け止められているんだなということで、自らの学校運営方針のある意味を少しアジャストするとか、あるいはそれを受けて教育をこのような形にしたいというようなことを言っているなど、そういうような校長自身がこの学校運営協議会から得ているものということについての報告は教育委員会には受けていたりしますか。

教育研究支援課長　年３回ある協議会なのですが、毎回開催報告というのが上がってきます。その中で協議を熟議した内容を教育委員会にあがってきまして、そこから担当であったり、ここの部分がもう少し詳しく知りたいなと思ったら、もう１回学校のほうに伺ってどういう熟議をされたのかと聞いてます。

津市長　それは校長の生の声で挙がってきてますか。こういう学校運営方針を説明した、地域からは概ね賛成だった。以上が終わり。

教育研究支援課長　正直そのような報告がありますのでそれから最後に突っ込んで、それは具体的にどういうふうな声があったのかというところを聞くようにしてます。

津市長　もったいないと思います。せっかくこういう組織があって、校長は基本的に結構孤独で学校組織のトップなので。教職員とのコミュニケーションというのはしますが、インターナルなので中の閉じられた空間の中で、外の方からいろいろ言っていただく機会がせっかくありますので、それを受けてなるほどこうしよう、ああしようというようなことなど、自分がこうだと思って喋ったり、子どもたちに言ったり、教員に言ったりしていますが、そうか、こういう受け止められるのかというような気づきを得ていただくような場所にしてもらえるとすごく良いかなと。市長にとって理解が変わるとき、時々よくそういう場面にあります。こういうふうに受け止められているのか、こういうふうな疑問が出るのか、あるいはこういうふうに批判をされるのかなど、そういうことがすごくいい意味で民主主義ですね。どうですか。

学校教育部長　実は今年にスタートしまして、学校サポーターとして校長先生のＯＢを今年度から任用させていただきまして、各学校４月から回っていただいております。そうしましたところ、ある校長先生のほうから学校運営協議会を開催しましたら、学校運営協議会の委員さんから非常に厳しい御意見ばかりを頂きまして、私としましてはいきなりスタートしようと思いましたが、少し落ち込んだと言いますか、どうしようかと思いましたことを学校サポーターに御相談しました。

ところが、学校サポーターの方はそういうことはすごく大事なことで、御自身がそのように発信しましたことはいろいろな考え方がありまして、そこはやはり大事だと思いまして、その方にさらにもう１つ話をして詰めていったらまた何かが出てくると思うよということを御助言していただきました。それで、校長先生の方からはあそこで学校サポーターに来ていただけなければ、落ち込んで終わっていたけどいろいろ聞いていただきまして、少し光が見えてきまして、そのかたからもそのことを積極的につながれました。

その結果、もっともっと深いところを考えていただいておったということが分かりましたので、やはり１回、２回の学校運営協議会では分からないところもありますので、そこから発信していただきましたことをより深めていくためには個々の繋がりも大事だと思います。校長は結構自分のときも、その家へ行って話し込んだりなどして会議以外のところでも話し込んでいましたよということを少し言ってきましたということを、学校サポーターからも少し聞かせていただきましたというそのような事例もあります。

津市長　外からのそういう御指摘をぜひ前向きに活かしていただけるといいですね。ついでに言うわけではないですが、報道機関からの指摘もありますね。

次行きましょう。もう１つの結構重なっているのですが、地域学校協働本部での協働活動ということが活発に行われているということも１つ大きなポイントになりますが、そちらの角度からの御意見を重ねてどうぞ御発言ください。

西口委員　先ほど富田委員が言われましたように地域のものを教材として学校で使おうとするときに、いかに授業時間内でそれをしていくか、教育課程を編成していく上で、学校としてマネージメントを考えて地域の資源がこの学校に何があるのかというのをしっかりと学校長なり学校の教員が掴んだ上で、学校の教育課程に中に位置付けてしていくこと。では、その地域の資源が何かというときに地域学校協働本部がどんなことをやってくれるパーツとして持っておられるかということにつながっていくかなといつも考えていました。

何でもかんでも支援を支援をと言っていても、多くのしていかないといけないことがいっぱいありまして、その中でこの学校にこの地域の資源がある、この地域の資源を使ってまずは学校をつくっていく。要するに地域からスタート、地域とともにある学校づくりということなのですが、地域の資源を活用して学校をつくっていく、そのことによって学校が活性化され、それを地域に還元していく。まずはやはり一番としてその地域学校協働活動を通じて地域の資源をしっかりと把握してそれを教育活動にもってくるというスタートを考えたらいいなと思いました。

津市長　そうですね、そのとおりですね。どうぞ、富田委員。

富田委員　先ほどお話させていただいた、やはり子どもとか現場の先生たちの声が、気になるところではありまして。先ほどのいくつかの例を聞いていてもどちらかというと何かしら子ども側に問題があって、その問題解決のためにいろいろな手を尽くしたのですが、学校ではうまくいかないので、地域の手を借りようと、そういう発想のものが多い気がして。子どもってそんなに問題を起こすんですかっていう感じがやはりしてしまいます。

そういうふうに問題解決のための担い手として地域コーディネーターというふうな役になってしまうと、こんなしんどい役やりたくないわという話になると思います。そうではなくて、子どもと一緒に楽しいことをつくり出していきましょうみたいな、子どもがやりたい思いというのがまず先にありまして、そのやりたい思いを実現させるためには、私たち大人として地域の資源はこんなものがあってどういうものがあるからこんなことできるよねっていうことを話し合って子どもたちに提供して、子どもたちと心底楽しむ。そういう地域コーディネーターですよって言われたら、ぜひやりたいですねっていうふうになるような気がして。何となくネガティブなサイクルで考えがちなところが多いような気がしました。

西口委員　結構学校がそんな感じの部分もありますが、多くはネガティブではなくて、頼んでいるというか、こういうことで支援してくださいとかこういうことでお願いできませんかという結構前向きなのです。それが地域の資源かな。

津市長　逆に地域の側から学校にこう絡んでほしいとかこう関わってほしいとか言ってくることは。

西口委員　それもあります。例えば今回の民生委員の出前授業なんかさせてくださいって堂々と言いに行ったら、そしたら学校はそれを学校の教育課程の中に位置付けて、反対にタブレットを持ち込んできて、その委員さんたちを撮りながら新たな授業につなげていくという、その民生委員さんは学校の学習の中でタブレットをこんなに活用されているのか、こんなに上手に質問してくるのか、国語の教材でこんなふうになっているのか一度に分かるので、やる意味あると思います。

山口委員　熱意ある発信と書いてありますが、これはパッションを誰が持っているかということですね。すごく先生方がお優しいので、心折れるという話もありましたが、大体最初はできないとか無理だとか言いますよ。言いたいですよ。誰でも。難しいとか。

　そこをそれでもパッションで頑張ってくださいと、どのような体験もどのような経験も子どもにとって無駄になることなんて何もないし、全員にとって有益なことではなくても、誰かにとって有益なことを繰り返してくことによって体験につながっていくので、ビンゴの穴が開くようだということです。なのでそこで本当に押していく力がいるのかなと思っていて、それくらい関わりを持っていただける方は地域の中にたくさんいると思います。いても関わり方が分からない、それはおやじの会がすごく盛んな所などもありますので、お父様もお母様も一緒だと思うんですね。おじい様もおばあ様も、押していく力が足りないのではないのかなと思います。参加したら楽しいですからということで関わっていく、それが巻き込む力かなと巻き込まれる力かなと思います。

田村委員　私の感覚なのですが、地域学校協働活動の活性化という課題なのですが、もっと実際には地域づくりというか、まちづくりというかそういう話で考えれば考えるほど、教育委員会だけの問題じゃないと思えてきます。

　なので、地域コーディネーターが一生懸命やっていただくわけなのですが、先ほどの説明の中でもありました地域と学校のウィンウィンが本当に大事だし、ネガティブなこと申し上げますとだんだん地域のコミュニティというのが、昔ほ

どではなくて、どんどん人と人との繋がりが切れてきている世の中でそれをもう一度縫い直す作業を地域コーディネーターだけ負うのはおかしいではないですか。
　もちろん市長部局にもそういう担当の部局当然ありますし、そういうところとうまく。山口委員が言われました人を含めた地域資源がどのようになっていて、どういうふうに使っていくかというのをやはり教育委員会なり生涯学習課が持っているだけの情報だけで勝負したのでは、完全ではないと。全市を挙げていろいろな部局を巻き込んでというふうな大きな見方、うまく言えませんがそれが必要ではないかなと思います。

津市長　この後教育長にまとめていただくのですが、多分学校は地域のいろいろな活動などそういう部分に力を入れるか、いろいろなものが元々ありまして、学校は学校で独立してきた歴史があります。辛うじてＰＴＡとかこども会とか学校から出てきた地域活動で行っています。ところが、この話が広まってきてから学校が完全に地域の中に一員にわーっと溶け込んでくようなところまで来ていますので、ですから田村委員が今おっしゃったようにそれは教育委員会や学校だけの問題だけではなくて、地域づくり・まちづくりでしょうとそうなってきたということだろうと思うんですよね。
　ですから、まさにこれが地域学校協働本部などの活動そのものに次第になってきたのかなという気がします。一方で教育委員会から見るとあそこはうまくしている、ここはいまいちというのがすごく気になると思いますが、あまり気にしなくてもいいのではないかなと一方でも思っていまして、上手にするところがどんどん出てくれば、うちもあんなふうにやってこうとか言うようなことになってくるのではないかと、そういう類のものじゃないかなと思っていまして。
　どうぞ、教育長。

教育長　要は学習指導要領の中に、今社会に開かれた教育課程というのがありますよね。あれが結局地域の力を借りながら、そしてより良い学校教育を通じてより良い社会の形成者を創って、それがやがてより良い社会になるという、そういう連携になりウィンウィンになるべきことなんです。
　なのでいろいろなところで言っていますが、小学校や中学校もナイトスクールもいろいろ力を借りていますが、基本的には小学校は地域の方にいっぱい来ていただいて、お手伝いをお願いしたい、学校のいろいろな教育、中学校は全校いろいろありますが、地域に出ていって地域のためにいろいろなことをして、そこで育っていく部分になる、学校ではなくて。そうなると何が大事か、先ほど富田委員の話を聞いていまして、生徒会・児童会活動がもの凄く大事だと、リーダーズ研修というのを津市は一生懸命行っています。脱炭素のことだったり、去年までは防災のことだったり、あれを行っていて、いかに子どもたちがいい発想をし

ていて、本当にいい考えを持っていまして、いろいろなやる気があって、行動力もありまして関心します。中学生の生徒会のメンバーを見ていまして、今脱炭素のことをしていますが結構楽しいんですよ。子どもたちも多分そう思ってくれていると思っていますが、ですから地域とともにの中に、今言われていました子どもたちの考えとか子どもたちの思いなど、生徒会・児童会ここをどう絡めていくあたりが、すごい課題だと思いますので、そのあたりぜひ発信していただいて、負担にならないように。児童会・生徒会活動いろいろしていますが、その地域と何か絡めるような何かできないかなと思います。地域とともにしていきたいと思います。

津市長　ありがとうございました。いろいろと事柄の実情かなり広がったようになりましたが、いろいろなヒントがあるかと思いますので、そういうところを踏まえまして、地域とともにある学校づくりを頑張っていただきたいと思います。
　それでは事務局へお返しします。

教育総務部長　それでは、２のその他に入りたいと思いますが、事務局は特に用意はございませんが、何かございますか。ないようでございますので、本日の事項はこれで終了いたしました。

市長　本日はありがとうございました。